

機関番号：13101  
 研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2008～2010  
 課題番号：20500227  
 研究課題名(和文) 「ケータイのディスプレイを見る行為」における非言語コミュニケーションの役割調査  
 研究課題名(英文) The investigation of the role of "looking at keitai (mobile phone) displays" as non-verbal communication  
 研究代表者  
 中村 隆志 (NAKAMURA TAKASHI)  
 新潟大学・人文社会・教育科学系・教授  
 研究者番号：60264967

研究成果の概要(和文): 1999年のNTTドコモによるiモードサービス開始以降、人々は至る所で日常的に「ケータイのディスプレイを見る行為」を繰り返すようになった。その結果、この行為は非言語コミュニケーションとしての役割を持つようになってきた。本研究は、日常生活の様々な場面における「ケータイのディスプレイを見る行為」の機能と役割、並びに「ケータイのディスプレイを"見せる"行為」との関連について、アンケートを行って実証的に明らかにした。

研究成果の概要(英文): Since NTT docomo started the "i-mode" service in 1999, so many people have repeated the action of "looking at their own keitai(cell phone) displays" everywhere in their daily life. As the result, this action has become to take a role as non-verbal communication. This research performed questionnaire and substantially revealed about the role of "looking at their own keitai(cell phone) displays" and about the relation to the action of "showing their own keitai displays to others".

#### 交付決定額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

#### 研究分野:

科研費の分科・細目:

キーワード: 携帯電話 ケータイ 非言語コミュニケーション モバイル

#### 1. 研究開始当初の背景

(1) 現在、公共空間を行き交う人々の内、ケータイのディスプレイを見ている人の割合が高くなってきている。本プロジェクトはこの行為が人々の間で、非言語のコミュニケーションとして機能し始めているのではないかと、という疑問から出発した。研究代表者と研究分担者は、大学生に対する予備調査の結果から、全国規模の広いインフォーマント

対象のアンケート調査が必要であることが導かれ、本研究プロジェクトを開始した。

(2) 予備調査やインタビュー調査の途上、ケータイユーザ達が行う「ケータイのディスプレイを見る行為」には、さらにそのディスプレイを"見せる"行為とも関連があることが推測された。このことから、「ケータイのディスプレイを"見せる"行為」と併せて調査する必要があることを確信し、さらに規模を

広げて調査を行った。

## 2. 研究の目的

90年代後半以降、ケータイがもたらす影響の問題は、通話マナーの問題に始まり、過剰利用やコミュニケーションスタイルの変化、出会い系やネットいじめの被害などが差し迫った問題として大きく取り上げられてきた。しかし、「ケータイのディスプレイを見る行為」そのものを人との間のコミュニケーションとして捉える観点の研究がなかったため、この行為に対する学術的見解が乏しいことを、研究代表者と研究分担者は問題視していた。この行為に対する実態調査を行い、その機能と役割を理解するための視点を形成することを本プロジェクトの目的として、研究計画を立案した。

## 3. 研究の方法

日常生活の様々な場面での「ケータイのディスプレイを見る行為」に対する理解を深めていくために、一般ユーザにアンケート調査を行う方法を採用した。被験者に自らの経験を問う形でのアンケート調査であり、ネット調査を専業とする機関を活用してアンケートの実施・回収を行った。調査は全国のインフォーマント対象で、500人程度から1600人程度の回答を得ることができた。男女はほぼ同数で、年齢構成(20歳以上)もほぼ均等である。調査は複数回を行い、それぞれの結果を組み合わせて分析を行うことで、多くの知見が得られた。

## 4. 研究成果

### (1) 公共空間における「ケータイのディスプレイを見る行為」

インフォーマントへの調査の結果、一人で公共空間において、用もないのに(連絡すべき用件があるわけでも、着信があるわけでも、すぐに見たいコンテンツがあるわけでもないのに)ケータイを取り出したくなる用法は大きく分けて3つに別れることを示した。それぞれ、

用法a: 暇つぶしのため、  
用法b: 周囲との干渉を避けるため、  
用法c: 多重文脈性をまとめるため、

に分類される。

さらに、インフォーマントに場面ごとのケータイ利用傾向を尋ねたところ、それぞれの場面に応じた利用が為されていることを示した。このことは、公共空間には、様々な気

まずさやトラブルの種が存在しており、人々は、公共空間に適応していくために、「ケータイのディスプレイを見る行為」による非言語コミュニケーションを必要としていることを表している。

この利用傾向は、ユーザの年代層間の比較において、ほぼ同様の傾向が現れた点からも、公共空間における「ケータイのディスプレイを見る行為」の有用性が理解される。一方、男女間の比較では、女性ならではの特有のトラブルや不快な状況に遭遇しやすい場面で「ケータイのディスプレイを見る行為」の利用頻度に有意な差が現れた。このことは、公共空間における女性の不利な立場を表すと共に、ケータイが公共空間の女性にとって、不可欠の存在になりつつあること、一般にケータイが女性と親和性が高いと言われることの要因の一つであることを示唆する知見にもなっている。

### (2) 親しい者同士が行う「ケータイのディスプレイを見る行為」

これまでの予備的なインタビュー調査から、親しい者と対面している場面において、友人がケータイを取り出してディスプレイを見ることに対する印象が人によって随分異なることがわかっていった。また、この印象の差が、本人のケータイ利用経験と関連があることも、併せて推測できていた。このことを確認するため、大学生にアンケート調査を実施した。

調査の結果、友人との会話中にケータイを取り出す行為に対する印象は多岐に別れ、正反対(「非常識」「マナー違反」から「普通」「いつものこと」まで)の内容を持つ者同士が多数いることが確認できた。

また、この行為に対する印象は、自分自身が同じ行為を行った経験があるかどうかで異なったものになることも示された。この行為の経験者は、友人との会話の最中という場面においても、ケータイを取り出したくなる事由は、様々に訪れるものであることを理解した上で、他者の行為を理解しようとする傾向があることが示唆される。

### (3) 「ケータイのディスプレイを"見せる"行為」の非言語コミュニケーション的機能

00年代後半に至っては、ケータイ端末を用いた身体的なコミュニケーションは、単に自分のケータイのディスプレイを見るという行為だけに留まらず、自分のケータイを他者に"見せる"という行為を含む状況になってきている。さらにこの行為は、親しい者同士がディスプレイを共に直接見て鑑賞する、という「お茶の間」的なコンテンツ視聴を実現

するため、強力な口コミの場という解釈も可能である。このような観点から、全国規模のネット調査を行い、「ケータイのディスプレイを"見せる"行為」の非言語コミュニケーションとしての機能と口コミの効果を実証的に明らかにした。

モバイル広告やケータイのwebサイトを日常的に自発的に閲覧するユーザは、かなり少数派であり、その中でも、自分の気に入ったコンテンツを人に勧める際に「ケータイのディスプレイを"見せながら"」行うユーザは、さらに少数である。しかし、これらのユーザは、ケータイを利用して他者と交流することに積極的であり、日常的におもしろいコンテンツを探して、それを友人達の会話に利用する傾向にある。これらのユーザが、モバイル広告やケータイサイトの活用の輪を広げていく可能性があることを指摘した。

さらに、「ケータイのディスプレイを"見せる"行為」を非言語コミュニケーションとして見た際に、その送り手("見せる"側)と受け手("見せられる"側)との間には、感覚的な齟齬があることを示した。「ケータイのディスプレイを"見せる"行為」の受け手("見せられる"側)は、相手("見せる"側)が自分自身を信用していること、自分自身に好意を持っていることを、話の中身と同時に受け止める傾向にあるが、この行為を頻繁に行う者は、相手が「自分は信用されている」と受け止めることを予想して行う傾向にあることを調査結果は示している。

(4) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

上記で述べた計6本の論文は、いずれも査読付きの研究論文として刊行されている。とりわけ、情報通信学会誌の論文は、その独創性と新規性が評価され、第11回情報通信学会論文賞佳作を受賞した。

<http://www.jotsugakkai.or.jp/ronbunsho11th.html> (情報通信学会ホームページ)

(5) 今後の展望

ケータイ端末を用いた非言語コミュニケーションは、成果で挙げた(2)の結果と同様に(3)の結果においても、自らの経験によって、その利用の仕方や意味づけが変化する傾向にある。ケータイ端末を用いた非言語コミュニケーションそのものは、歴史上、まだ始まったばかりといっても良い状態に在り、ユーザ達の経験は、まだまだ積み重なっていくことから、今後も変化を繰り返していくことが予想される。ケータイの活用が広がる中で、多くの人々が重きを置く直接的な対面の

場において、ケータイがどのように扱われ、その扱いがどのような非言語コミュニケーションを取り持つて行くのか、また、この行為がどのように理解されていくべきなのかについて、更なる調査・研究がますます必要になってくることを研究代表者・研究分担者は確信している。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

中村隆志, 大江宏子: "もうひとつの非言語コミュニケーション「ケータイのディスプレイを"見せる"行為」", 情報文化学会誌, Vol.17(1), pp.11-18, (2010).

中村隆志, 大江宏子: "モバイル広告・ケータイサイトに関する口コミ経路の調査 - 「ケータイのディスプレイを見せる行為」の活用 - ", 情報通信学会誌, Vol.27-3 (92号), pp.117-130, 2009.

中村隆志, 大江宏子: "非言語コミュニケーション「ケータイのディスプレイを見る行為」における「気づき」の効果", 情報文化学会誌, 16(1), pp.31-37, (2009).

中村隆志, 大江宏子: "公共空間における非言語コミュニケーションとしての「ケータイのディスプレイを見る行為」", 情報社会学会誌, Vol.4, No.1, pp.27-37, (2009).

中村隆志: "親しい者で行う非言語コミュニケーション「ケータイのディスプレイを見る行為」とその多様化", 情報コミュニケーション学会誌, Vol.4, No.s1&2, pp.4-9, (2008).

中村隆志: "多重文脈性をまとうツールとしてのケータイ", 情報文化学会誌, 15(1), pp.12-19, (2008).

[学会発表](計10件)

ITヘルスケア学会第2回年次学術大会 (専修大学:平成20年5月)

第25回情報通信学会大会(駒澤大学:平成20年6月)

第16回情報文化学会全国大会(東京大学福武ホール:平成20年10月)

第6回情報コミュニケーション学会大会(園田女子大学:平成21年3月)

情報社会学会 2009年度年次研究発表大会(JICA地球ひろば講堂:平成21年6月)

第17回情報文化学会全国大会(東京大学山上会館:平成21年11月)

第5回日本グローバルマーケティング学

会全国大会（日本橋倶楽部：平成 21 年 12 月）

第 27 回情報通信学会大会（早稲田大学国際会館：平成 22 年 6 月）

第 18 回情報文化学会全国大会（東京大学山上会館：平成 22 年 11 月）

第 6 回情報コミュニケーション学会大会（園田女子大学：平成 23 年 2 月）

## 6 . 研究組織

### (1) 研究代表者

中村 隆志（NAKAMURA TAKASHI）  
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授  
研究者番号：60264967

### (2) 研究分担者

大江 宏子（Oe Hiroko）  
横浜国立大学・経営学部・教授  
研究者番号：70456333

### (3) 連携研究者

上松 恵理子（Uematsu Eriko）  
新潟大学・大学院現代社会文化研究科・博士研究員  
研究者番号：50594462